

現代政治の 이슈 (政治学現地研修・沖縄) 実施報告書

2025 年 9 月 23 日

武田 知己

2025 年度の「現代政治の 이슈 (政治学現地研修・沖縄)」は、6 月 22 日から 25 日にかけて、3 泊 4 日の行程で、総勢 21 名の参加学生とともに、無事現地研修を終えました。

<事前学習>

- ・ 1 回目：5 月 10 日 (土曜日) 10:55-14:45
行程確認、講義 (沖縄戦 80 周年、1995 年の転換から 30 周年)
- ・ 2 回目：6 月 14 日 (土曜日) 10:55-14:45 ※zoom のみ
講義 日本の安全保障の歴史と制度について

<現地研修前の課題>

課題 1：林博史『沖縄戦』(集英社新書、2024 年)の「序章」「第 1 章」および波多野澄雄・宮城大蔵編『日本外交をどう考えるか 日米安保・歴史問題から沖縄まで』(慶応義塾大学出版会、2025 年)の「第 1 章 (日米安保から日米同盟へ)」と「第 6 章 (沖縄の本土復帰と基地の重圧)」をそれぞれまとめる。全体で A4、3 枚程度。

課題 2：以下のテーマについて、A4、3 枚程度 (4000 字前後) であなたが思うことを答えなさい。「1995 年以後、沖縄は「何故」「誰」に失望し、怒ったのか。そしてあなたは「誰」なのか」。参考文献「沖縄から伝えたい 米軍基地の話」(令和 5 年度版)。

※6 月 22 日 (火曜日) までに manaba で提出

<現地研修行程>

6 月 22 日 (日曜日) 仲本和氏講演会・ワークショップ



戦後 80 年を経て、語り部活動の現状と課題について、お話しいただきました。

6月23日（月曜日） 慰霊の日の式典参加と辺野古視察



戦後80周年の今年、式典に参列できたことは一生忘れない記念になりました。

その後は、辺野古を視察しました。



6月24日（火曜日） 自衛隊駐屯地・基地見学と上大謝名自治会ヒアリング

翌日午前中は、那覇の自衛隊基地・駐屯地を視察し、懇談しました。



午後は、毎年お世話になる上大謝名自治会にお邪魔し、基地周辺にすむ実感をお話しいただきました。大城会長はじめ、皆さま、今年もありがとうございました。



6月25日（水曜日） 各自で博物館視察

最終日は自身でテーマを見つけ、博物館などを回りまして、四日間の日程を終えました。

<事後学習>

2025年7月13日（日曜日）までに参加レポート提出

<総括>

学生たちからは帰京後報告書を提出いただきました。その一端を紹介します。

・中本氏の後援会

事前課題では、沖縄で起きた少女暴行事件での沖縄の人の苦しい思いをしたことや、その時の日本政府の弱さなどを知ることが出来た。アメリカに強く出られない日本の構図や、本土の安全のために沖縄が犠牲となっている状況など、本土の人と比べると不満があると思った。また、辺野古移設問題での政府と沖縄の対立があるという認識があった。

実際沖縄に行き、1日目は講演会で仲本さんのお話を聞いた。仲本さんのお話では、沖縄戦のことをしていただき、沖縄戦で血を流す沖縄県民の絵が印象的だった。体の部位が木にぶら下がっている絵や、家族が倒れている絵など、当時の悲惨な現場がよくわかるような絵だった。

また、当時の沖縄戦のことを沖縄の人達は意外と知らないと言っていて驚いた。沖縄の人は沖縄戦のことをほとんど全員知っていると聞いていたので、知らない人が多いと聞き、衝撃だった。沖縄戦が長引いた理由として、本土での戦いにならないように米軍の数をできる

だけ減らし、停戦交渉に持ち込む意図があったことを知った。また戦争に沖縄市民を巻き込んだことで、本来犠牲にならなくても良かった命がたくさんあることや、死者の 50%は沖縄県民で 4 人に 1 人は死んでいるということ、集団自決という名の強制的な死によって仲間同士でも命が奪われていたことなど、残酷な日々が長期的に続いていたのだと知った。兵力 80%を失ってもまだ戦争を続ける指示から、当時の日本政府の作戦が沖縄の人達を捨て駒として軽視しているように感じてとても悲しくなった。

<平和祈念資料館・慰霊の日の式典参加>

・平和記念資料館を訪れた際、展示の中にあった写真に深い衝撃を受けたものがあった。特に、幼い子供たちが命を落とした様子をとらえた写真は目を背けたくなるほど痛ましく言葉が失った。別の写真の撮影日を見ると沖縄戦の終結 1 日前。この戦争があと一日早く終わってれば助かった命だったかもしれないという重さがずっしりと来た。

戦争がいかに無差別で理不尽なものであるか、頭では理解していたつもりだったが、現実には記録として残された写真を前にすると、その重みが圧倒的に迫ってきた。

事前学習を通して、沖縄戦が「住民を巻き込んだ地上戦」であったことは理解していたが、実際に遺された記録や証言に直に触れることで、「一般住民も犠牲となった」という文言の背後にある、ひとつひとつの命や人生の断絶が、より具体的に実感されるようになった。

6 月 23 日の「慰霊の日」の式典にも参列した。平日の昼間に行われたにも関わらず老若男女様々な人が参列しており、沖縄ではこの日がいかに大切にされていることを肌で実感した。多くのメディアが取材に来ていたのも見かけた。しかし、上大謝名自治会の方からは、「式典の様子がニュースで最初に報道されるかと思っていたが実際はそうではなかった」と聞いた。本土と沖縄との間にある沖縄戦に対する認識や向き合い方の違いも実感した。

<部隊視察>

沖縄 3 日目、陸・海・空の三つの自衛隊基地を訪問する機会を得た。普段はなかなか知ることができない自衛隊の役割や実際の活動内容について、現場の方々から直接説明を受け、実物を見学できたことは非常に貴重な経験となった。

最初に訪れたのは海上自衛隊の基地であった。説明では、海上自衛隊には主に「外交的役割」「警察的役割」「防衛的役割」の三つの役割があると紹介された。中でも「外交的役割」について、米軍との連携の重要性が強調されており、その関係を良好に保つためには「一緒に美味しいご飯を食べること」が大切だということであった。

次に訪れたのは航空自衛隊の基地である。ここでは、第 9 航空団司令であり那覇基地司令による講話と質疑応答が行われた。司令官の存在感に圧倒され、私自身も非常に緊張したのを覚えている。私が「現在の航空自衛隊の最大の課題は何ですか？」と直接質問したところ、「人材育成が最も重要な課題である」との回答をいただいた。人材が不足していることで実行可能な戦略が限られてしまうため、多様な戦略を実現するには人材の確保と育成が

不可欠であるとのことであった。この「人材不足」の課題は、海上自衛隊や、後に訪れる陸上自衛隊でも共通して挙げられており、自衛隊全体の深刻な問題であることを実感した。

最後に訪れたのは陸上自衛隊の基地である。陸上自衛隊の主な任務は、沖縄全域の防衛・警備・災害派遣、そして不発弾処理である。特に印象に残ったのは、「自衛隊は武力ではなく、県民の力だけでは対応できない事態に対応する存在であり、二度と沖縄戦のような戦争を繰り返させないことを使命としている」という説明であった。

<上大謝名自治会>

米軍基地に反対している自治会ということで研修前はどのような過激な活動をしているのか少し警戒していた。しかし研修で自治会の方と顔を合わせると優しくそうな方たちであり私の認識と異なっていて混乱した。お話して下さった内容は「ごく当たり前のこと」だった。この「当たり前のこと」というのは日常生活を取り戻したいということである。市街地の真ん中に大きな基地があり市民はそこを大きく迂回して行き来し生活している。さらに基地の数メートル隣には子供たちが遊ぶ公園があった。聞き取りをしているときには実際に米軍機が飛行場に侵入する時の騒音を聞くことができた。現地研修を通じ五感で基地問題を住民目線で感じる事が出来た。基地周辺に住む人は基地がない普通の生活を送りたいという願いに触れ、マスメディアを通じて見る基地反対派のイメージとの差に驚いた。懇親会では自治会の方の本音を知ることができた。今の安全保障環境を考えると沖縄の米軍基地は必要ではないかという趣旨の質問に対し NO という答えではなかった。沖縄に基地が必要と主張する人の気持ちも分かると一定の理解を示した。これを聞いたとき私は申し訳ないという気持ちに襲われた。私（本土の人間）から見た基地反対派の人の印象は安全保障環境を十分に理解していないで反対の声をあげているというものだった。しかし現地の基地問題を抱えている人は一定程度の基地の必要性を理解しつつ日常の生活を返して欲しいと願う人であり自分は沖縄問題に関し分かったふりをしていたと痛感した。

引率者からは、批判する前に現実を知ることの大切さ、良いとも悪いとも判断できないものもやとしたその感覚が大事なので、その気持ちを忘れずに、ずっと沖縄と日本の安全をどう守るかに関心を持ちつづけてもらいたいと総括しました。

お忙しい中、引率にご苦勞頂いた川名晋史先生、金沢じゅん先生にお礼申し上げます。

(文責・武田知己)